

「A I 時代における理学療法士」理学療法学科教員 北村 勝

理学療法士とは、身体に障害のある方に対し、基本動作能力の維持・改善をはかり、自立した日常生活を送ることができるよう、お手伝いする専門職です。高齢化が進む中、手助けを必要とする対象者は増加する一方で、理学療法士の活躍の場は、病院・診療所のみならず介護老人保健施設や行政等、多岐にわたります。また、最近は介護予防事業やスポーツ現場での障害予防等に関わる機会も増え、疾病予防や健康寿命延伸に対する貢献度も増えています。

さて、昨今の人工知能（A I）やロボット技術の発展には目を見張るものがあり、ウェアラブル製品（腕などに装着したまま使える端末）から得られる情報を理学療法に生かす試みも始まっています。時々、「A I に取って代われ、理学療法士は将来不要になるのでは」との不安の声も聞かれますが、現時点では、今後、A I と人がうまく共存し、それぞれ得意な分野を担当することにより（例えば分析や診断はA I が行い、人がそれを最終判断し、実際に治療を行う等）業務の効率が上がり、より質の高いリハビリテーションが提供できるようになるのではと考えられています。

「作業療法士の職域と需要」作業療法学科学科長 川上和敏

作業療法士という職業は、リハビリ専門職種の中でも身体障害だけではなく、精神障害や発達障害、老年期障害など多岐にわたって支援を行う医療関連職です。さまざまな病気や怪我、そしてどのような障害であっても、クライアントが人間らしく、さらにその人らしく生活できるように、あらゆる知識と技術を駆使して生活活動を支援します。

作業療法は医療技術の一つであり、多くの作業療法士が医療施設に勤務しています。大学付属病院や総合病院をはじめ、精神科や神経内科、整形外科などの特定の診療科に特化した専門病院が主な勤務先となっています。他にも小児の児童福祉施設や高齢者の老人保健施設などの福祉施設にも多くの作業療法士が働いています。近年では、特別支援学校や刑務所といった教育や司法の現場にもその職域が広がっています。超高齢化が進む日本社会において、保健領域である地域リハビリテーションや訪問リハビリテーションでの需要が高くなっており、病院や施設の外に出てクライアントが生活を送っている現場で働く作業療法士も増えています。

現在、作業療法士に対する職域や需要が拡大傾向にある一方で、人材の供給不足が発生しています。同じリハビリ専門職で求人数もほぼ同等の理学療法士は毎年10,000人強の有資格者が誕生していますが、作業療法士は5,000人弱と半分以下となっています。今後も作業療法士養成校としては、作業療法の知名度や志願者の増加を図りながら、優秀な人材を供給できるよう取り組んでいきます。

「看護師として母として」看護学科学科長 鳴海 繭花

日本看護協会は、「いのちをまもるプロとして。」をテーマに、看護の日のイベントを実施しました。毎年、この時期に合わせて「忘れられない看護エピソード」を募集しています。2023年度の最優秀賞は、「看護師として母として」という作品が選ばれました。

この作品は、4分半ほどのアニメーションになり、日本看護協会ホームページで紹介されています。小学生2人の母親である主人公が、看護師として働きながら、子育てとの両立に葛藤する様子が描かれており、私自身も同じ気持ちで働いていたことを思い出しました。もしかしたら、学生よりも、保護者の方々にハマる内容かもしれません。お時間のある時にでも、ご覧になってみて下さい。



(画像をクリックするとPDFが開きます)